

機器・試薬導入のマネジメント

◎山崎 真一¹⁾
広島大学病院¹⁾

院内の臨床検査室において、日々正しい検査結果を迅速に臨床へ提供することは私たち臨床検査技師としての本来業務になります。このために、装置や試薬の管理や保守、日々の精度管理業務、そして決められた手順による検査の実施が求められています。その一方で、新規装置の導入や定期的な機器の更新、また検査項目の新規導入や試薬の変更など日常の業務とは異なるイベントが発生します。このイベントは、現在行っている検査体制の課題や問題を解決するためのきっかけとして、また臨床とのコミュニケーションを深める重要なイベントになります。

特に機器の導入については、いったん導入するとメリットやデメリットを長期間に渡って享受することとなります。そのため装置の導入に際しては、導入コスト・ランニングコスト・メンテナンスコストといった経費の視点も重要ですが、各臨床検査室における今後の方向性や臨床ニーズ予測への対応も求められます。

現在、国内の病院数は約 8,300 施設であり、20 床から 900 床以上の施設まで様々な規模になりますが、ボリュームゾーンは 50 床から 400 床の規模になります。また、大学病院・公的病院・民間病院といった施設母体の違いや、首都圏・地方都市・地方地域といった医療圏による違いがあります。この様な状況の中で、一律の考え方ではなく各臨床検査室それぞれが院内での価値を考えるに当たり、私たちが置かれている環境の変化へ視野を広げること、将来を見据えた検査室運営に必要な機器選定をおこなうことが求められるのではないのでしょうか。

今回は「機器試薬導入のマネジメント」というテーマについて、各検査室が今後を考えるための情報提供として、私たちを取り巻く「外部環境」「内部環境」について整理を行います。外部環境については、日本の抱える少子高齢化や医療の偏在に向けた医療改革制度について、時系列的な変化や構造的制約から示される医療環境の変化を確認するとともに、予期せぬ環境の変化を併せて目を向けて見ます。内部環境については、臨床検査技術の変化とそれに伴う臨床ニーズの変化、労働環境やタスクシフトに代表される職場環境の変化、そして第 8 次医療法改正に代表される、検体検査の精度管理から品質保証へと要求事項の変化について確認をしていきます。

次に、院内検査の価値をどのように捉えるのか、また検体検査のワークフローを基に「課題抽出」や「業務改善」の考え方について整理を行います。院内に臨床検査室が存在する価値について、検査室からの視点ではなく医療機能としての役割や、経営的な視点、すなわち外部からの評価として検査室の価値を考えてることが求められています。また、検査結果を報告した後に、どの様な医療が展開されているのか興味を持っているのでしょうか。検査結果を正しく迅速に報告するという本来業務について、特に検体検査においては施設間においてその手順に大きな差異はありません。しかし、検査室に求められる機能の違いにより、問題点や課題点が異なって来ます。すなわち検査室に求められるニーズも多様性の時代であり、様々な施設が一律の手法や考え方で正解にたどり着くことはありません。このことを念頭に、目的意識をもった業務改善を行うことと、機器導入を行うことを関連付けることが、機器・試薬導入のマネジメントに相当するのではないのでしょうか。

機器・試薬の導入に際しても「目的・目標の設定」「成果の評価指標」そして「次世代の経験」を含めたイベントとし、各臨床検査室の院内価値向上につなげる機会として捉えることが望まれます。

広島大学病院診療支援部 (082-257-5550)